

書評

宮家準著

『神道と修驗道——民俗宗教思想の展開』

(春秋社・二〇〇七年)

曾根原理

—

修驗道とは日本古来の山岳信仰が、仏教・道教などの影響のもとで作り上げた一つの宗教体系である。仏教とは異なる名称を持ち、また独自の教団も存在するため、修驗道と仏教とは別個の宗教であるかのような印象を持つかもしれない。しかし、日本における形成・展開の歴史から、修驗道研究は通常、仏教学や仏教史の一部として扱われてきた。

一方、私自身の乏しい体験によると、海外の日本研究者の間

で修驗道は、しばしば仏教以上に注目を集めている。仏教が本来インドの宗教であり、日本仏教がその亜流と見なされがちなのに対し、修驗道こそ日本独自の宗教形態と考えられるためである。こうした観点を、日本思想史の研究者がきちんと受けとめてきたか、はなはだ心もとない気もする。そうした研究状況の中で、修驗道研究の第一人者として知られる宮家準氏（以下「著者」と表示）が、自らの立場から修驗道を通じて日本思想史を論じたのが本書である。

序

第一章 研究対象と研究方法

第一節 研究対象／第二節 研究方法

第二章 伊勢・三輪と修驗道

第一節 伊勢神道の成立と修驗道／第二節 三輪山の信仰

と三輪流神道

第三章 寺院鎮守と修驗

- 第一節 日吉山王権現の修行と祭り／第二節 高野山天野長床衆の歴史と修行
- 第四章 霊山の権現信仰と修験
 - 第一節 主要霊山の権現と王子／第二節 熊野曼荼羅の図像と信仰
- 第五章 御霊・疫神と修験
 - 第一節 御霊信仰とシャーマニズム／第二節 牛頭天王信仰と修験
- 第六章 護法神の神社と修験
 - 第一節 宇佐八幡と法蓮／第二節 新羅明神と役行者
- 第七章 使役神と修験
 - 第一節 伏見稻荷の護法と修験／第二節 稻荷信仰の展開と修験
- 第八章 民俗神道思想の展開
 - 第一節 吉田神道の大元宮／第二節 民俗宗教における柱の信仰と儀礼
- 第九章 霊山の修行と四国遍路
 - 第一節 霊山の抖擻と登拝／第二節 四国遍路の札所と修験
- 第十章 民俗宗教思想の展開と構造
 - 第一節 山岳信仰の展開と神社・修験／第二節 民俗宗教思想の展開／第三節 民俗宗教思想の構造

本書成立の経緯については「序」の中に、著者自身の記述がある。すなわち「当初二〇〇五年三月に国学院大学21世紀COEプログラム『神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成』の第IIグループ『神道・日本文化の形成と発展に関する調査研究』で、私が担当する『神道と民俗宗教・修験道の研究』の成果報告書として発表」したものを、「加筆修正のうえ刊行することになった」という(三頁)。また、もとなつた論考についても、本書の「初出一覧」に整理されている。それによれば、第一章第一節、第三章第一節、第十章第二・三節が新稿で、他についても「大幅に改稿した」とある(五三三―四頁)。

さらに、そこに至る調査研究についても、著者による次の言及がある。「まずこれまでの私自身の、また他の諸先学の研究もふまえて、霊山への日本人のかかわりについて概説的な知識を整理して、二〇〇四年に『霊山と日本人』(日本放送出版協会)として刊行した。次に私自身の修験道研究を固めるために拙著『修験道儀礼の研究増補決定版』『修験道思想の研究増補決定版』『修験道組織の研究』の三部作を再検討した。また民俗宗教と修験道の歴史、儀礼、思想のかかわり、さらにそれを母体として展開した新宗教について記した英文の“The Mountain of the Mountain: Shugendo and Japanese Folk Religion” (Keio University Press, 2005)を刊行した」。著者はさらに続けて、「①関連する先行研究(宮地直一、村岡典嗣、西田長男、久保田収、清原貞雄、大山公淳、堀一郎の著書が挙げられている)を再読し、

その他古典的研究をもとに定説を整理する、②現地へ赴き、扱われている儀礼等の調査を行い、絵図や発掘調査記録にもつき伽藍配置の把握を試み、対象となる社寺の歴史的展開と民間宗教者の関わりを把握する、③それらをうけて縁起・教義書・儀軌・唱導に関する史料を精読する、といった作業を行い、本書を作成したと述べている(四九―五〇頁)。

二

本書の特徴として第一に、大変な時間と労力をかけて成立していることが挙げられる。前述の経緯を経て本書では、日本における主要な霊山や霊場、その他拠点となる神社を網羅しつつ、修験道の関与や展開を論じている。また、ごく最近の著作や論文にも、必要な範囲で言及されている。これだけでも充実した成果といえるだろう。

しかし本書の力点はそこではなかった。著者自身の言葉では、「文献史学」に門外漢の私がこれら(評者注・莫大な史料を精緻に吟味した研究等)に見られない新史料を発見したり、原典にあたって史料さらに先学の研究の誤りを正すことは不可能である(四七頁)、「各章節の叙述は史実の解明というよりも、その社寺における民俗宗教思想に関する推論にすぎないものである」(五〇頁)と語られた。個別実証的な研究で新たな史実を発見するのが本書の目的ではないというのである。では本書の狙いは何か。著者によれば、それは、「民俗宗教論」という視

点と方法の主張である。

「民俗宗教」という用語と、その語をキーワードとする意味について、著者は次のように述べる。従来の宗教研究(特に個別宗派ごとの研究)は、主に宗教の送り手である教団の形成した思想や儀礼を扱っている。しかし、日本人の宗教を全体的に捉えるためには、それらを受け入れて生活している「常民」の宗教的要請に応じて、彼らの感覚に合うように習合させて唱導する民間宗教者の視点に立つことが必要である。年中行事、人生儀礼、俗信、それらのための施設・説話など、これまで民間信仰と呼ばれてきたものや、霊地を拠点に唱導を行う民間宗教者(山伏、巫女など)の説く集合的な思想や儀礼、さらに近年の宗教産業などを、民俗信仰(Folk Religion)として研究対象とするべきである。特に、中世末までに諸宗教において彼らの生活を守り、その破綻からの救済をはかるために考案され民間宗教者が伝播した民俗宗教の歴史的研究が、日本人の宗教生活を全体として理解するためには何よりも必要である、というのである。なお著者は、「民間信仰」という語が、ともすれば民間における自然宗教、成立宗教の残滓として受けとめられるため、その語を使用せず、地域の民俗の中に生き続け新しい宗教を生み出す可能性を持つものとして「民俗宗教」の語を使用する、また、「庶民」の語は本来、貴族などに対して一般の平民をさす語なので、社会の上層階級や知識層も含め日本人全体を一連の対象とする意味で「常民」の語を使用する、と述べる(言う

までもなく柳田以来の民俗学をふまえている)。

さらに著者は、民俗宗教の解明において神道と修験道に注目する理由、両者と仏教などの関係についても言及する。古来日本人は山岳、海上や川中の島を神霊の住まうところとして崇める一方で、魑魅魍魎の跋扈する異界として恐れてきた。特に弥生時代以降、山麓に定住して水田耕作を営むようになると、山には水を受けてくれる山の神がいるとし、里にしばしば現れる動物(蛇、狐など)をその使いとした。そして山麓に祠を設けてその神を祀り、豊穰と地域の守護を祈願した。また死後の靈魂は山に行って山の神と習合すると信じ、新生児も山の神から魂をうけることで生を得るとした。その後、山岳修行を旨とする仏教や道教が伝来すると、里人が恐れられた山岳で修行する宗教者が現れ、里人から超自然的な力を得た者と崇められ、治病などの現世利益的な期待をするようになった。著者は以上のような通説をふまえた上で、「霊山の麓や森に神社を設けて神霊を祀る神社神道、霊山に籠って修行する仏教、霊山の峰々を抖擻する修験道」と整理する(四六八頁)。さらに、「霊地の神を里の社に迎えて祀ることに淵源を持つ神道と、その霊地で修行して超自然力を得て人々の宗教的救済をはかる修験者などの山岳修行者が相補って、民俗宗教の中核をなしてきた」と把握する(三一九頁)。

そうした理解にもとづき著者は、修験者は中央の社寺に所属し、そこにおける民俗宗教的な思想や儀礼をうけとめた上で、

中世末までは民間を遊行し、近世期には地域社会に定住して活躍したのであるから、修験者こそが民俗宗教解明の鍵をなすと考えた。同様に修験道についても、シャーマニズム、道教、仏教、成立神道などの影響のもとに平安末期から鎌倉期にかけて成立し、室町時代に入って教団としての性格をとるに到った宗教であり、その宗教形態は、山岳や海などの霊地での修行によって超自然的な験力を修め、その力をもとに呪術宗教的な活動を行うことを中核としていることから、修験者は民間宗教者として民俗宗教の形成に大きな役割をはたしてきた、それゆえ修験道そのものが民俗宗教とも考えられる、と指摘する。

民俗宗教が日本宗教研究の中核であること、その鍵を握るのが修験道研究であるなら、従来の枠組は再考を迫られる。著者は従来の研究を「両部神道・修験道・陰陽道などの諸宗教を個別に研究して相互の関係を両者に見られる顕密の影響を検討する」ものとして批判し、本書の視点を「むしろこれらに通底する民族宗教思想の展開を解明する」と提示している。その「民俗宗教思想」の内実については、「霊山を神霊の居拠として、そこに入って祈念したり、それにふれ、さらに託宣を得たり、それと同化して呪術宗教的な活動をして庶民に利益をもたらすことの超自然的な根拠となる思想」を示し、霊地を曼荼羅としたり、そこに柱などに象徴される宇宙軸を考える思想はその一端を具体的に示すものであると言っている(四七五―六頁)。そして特に中世後期以降が、現行の民俗の原型が形成されたとい

う意味の重要性を持つと考えている。

民俗宗教の研究は、過去の日本という枠にとらわれるものではない。著者は、「日本の民俗宗教にみられる柱の儀礼や信仰は……アジア各地の民俗宗教の柱の儀礼や信仰と酷似している。これは日本の柱の儀礼や信仰がアジアのそれから影響を受けたことによる面もあるが、今一方で、ほぼ同じ水田稲作を営むことや、日本人が人種的にモンゴロイドであることから通底する面があるとも考えられ、今後より詳細な比較宗教学的の研究を試みることが必要とされるのである」(四〇六頁)とも述べ、民俗宗教の観点から、国際的な研究に展開する必然性を示している。また、「民俗宗教を母胎として新宗教が発生したり、行政、コマーシャルリズム、マスコミなどが、これらを積極的に利用して、日本人の靈性を喚起させている」現状をふまえ、それらをも包括する「日本宗教を全体として把握するための操作概念」として、民俗宗教を位置づけている(八頁)。

三

上記のように、本書は修験道を中心とする民俗宗教論の立場から日本思想史の可能性を追求した書であり、著者の長年にわたる研究蓄積の集大成的性格をも持つ。まさに労作にして、しかも地に足のついた問題提起の書であるといえる。しかし、不満な点が全く無いわけではない。

評者がかつとも強く感じたのは、問題提起の大きさに、その

成果が伴いきっていないように思われる点である。著者は主に第十章において、「各霊地ごとに個別に論じてきたことを全体として比較検討し、山岳を核とする神社と修験のかかわりに焦点において、日本の民俗宗教の展開を跡づけ」、その成果にもとづき全体の結論として「日本の民俗宗教思想の基本構造に関する私見」を提示するとしている(五一頁)。しかし評者の見るところ、著者が民俗宗教の展開として叙述するところは、従来の修験道通史に神道や民衆宗教の要素を加えた程度にとどまっているように見える。また、民俗宗教思想の構造として霊地、神格、儀礼、宇宙観などを論じている箇所も、従来の著者の修験道思想研究を要領よくまとめた印象をもった。いずれも充実した内容で有益ではあるが、新たな問題提起をうけて従来の図式が大きく変化したように受け取れなかった。その理由について考えるなら、日本仏教史像の再構築という課題が浮かび上がるように思われた。

冒頭でも述べたように、従来の修験道史研究は、仏教史の一部として扱われる傾向が強かった。黒田俊雄氏の「顕密体制論」により、修験道は仏教史の中に居場所を与えられた。それ以前に比べれば進歩かもしれないが、著者の目指す視点とは正反対のベクトルを持つ。黒田氏以降の仏教史研究が「顕密仏教」の「正統派」を重点的な研究対象としたため、修験道がその派生として、全体の中で位置を得たのである。それに対して著者のように、神道や修験道に基点をおくなら、早くから深い

関係が知られていた「正統派」にとどまらず、「異端派」にまで再解釈の手を伸ばすことが求められる。本書では、著者の再解釈の対象は「正統派」にとどまり、そのため結果的に、従来の図式の見直し程度の印象となっているように思われるのである。

もし著者の視点を貫徹させるなら、民俗宗教の観点から「異端派」の再解釈が求められるだろう。実際、その作業は実現可能性があると評者は考えている。親鸞も日蓮も、最初は新興宗教の開祖という側面も持っていたのではないだろうか。彼らの教団が戦国期までは、後世と比較にならないほど弱小であったことは、すでに専門家の間では常識となっている。個別的にも、非農業民と初期真宗の関係や、禅宗の伝播における祈禱や儀礼の意味など、従来の通説を塗り替える研究が現れてきている。それに加え、いわゆる本覚思想研究を通じ、日本仏教は本来の仏教ではないという議論が市民権を得た。また、いま現在の仏教教団のあり方に関する問題意識から、アジア仏教の中の日本仏教の独自性(特殊性)が、良くも悪くも意識されるようになってきている。こうした研究の流れは、総体として神道やいわゆる民間信仰の自立性(仏教に従属するだけの存在として把握しない)を認める研究潮流を形成しており、そうした動向が「民俗宗教」の語で適切にあらわされるなら、研究史が新たな段階に進捗することになるだろうと思われる。

それに関して心強い援軍かもしれないのは、日本史研究にお

ける近年の動向である。従来埋もれがちであった民間の宗教者について注目することで、同時代社会の構造を問い直す作業が近年進められている(高埜利彦ほか編『近世の宗教と社会』全三巻など参照)。史学側のこうした研究動向は、仏教を社会から遊離したものと見なさず、その教学や思想を同時代社会の中で位置づける作業を通じ、「民俗宗教」との関係についても解明を迫るものと思われる。

著者は、自らの長年にわたる蓄積から、日本思想史の枠組を問い直した。今度は、日本思想史研究者の側からボールを投げ返す番なのではないか。著者の問題提起をうけ、既成の宗教思想史の枠組みを相対化し再構築する道を開くため、個別宗派の教学史の集合体という叙述スタイルを見直し、本来の意味の日本宗教思想史を描き直すことが求められているように感じる。本書の課題を正面から受け止めることで、日本思想史は新たな段階に進むことが出来るのではないか。評者はそのように考えている。

(東北大学助教)